

モーツァルト：ピアノ四重奏曲 第1番

1785年、ウィーンの音楽出版社ホフマイスターは、モーツァルトにアマチュア向けのピアノ四重奏曲を3曲、依頼した。この時代のウィーンではピアノ三重奏曲の人気の高まっていたのに、なぜホフマイスターが四重奏曲の出版を目論んだかは謎である。ただ、ヴィオラを愛奏していたモーツァルトが、その申し出を快諾したことは想像に難くない。

1曲目のト短調(本曲)は10月16日に完成。さっそく12月に出版されたが、モーツァルトの意欲が勝ちすぎたのか、ピアノ・パートが難解で、売れ行きは芳しくなかったという。そのため、翌年6月に完成した2曲目の変ホ長調をホフマイスターはライバル出版社のアルタリアに転売してしまう。結局、3曲目が作曲されることはなかった。

第1楽章のアレグロは、交響曲第25番、第40番と同じ「ト短調」作品ならではの、研ぎ澄まされたハーモニーとリズムに貫かれており、冒頭で提示されるモチーフが徹底的に展開される。第2楽章は、深い呼吸とともに進む、変ロ長調のアンダンテ。第3楽章はロンド・ソナタ形式。豊富なニュアンスをちりばめながら、絶妙なアクセントを付けて終曲する。

ベートーヴェン：弦楽三重奏曲 第4番

作品9に含まれる3曲のうち、唯一の短調作品で、ベートーヴェン二十代後半の傑作。1797年の早い時期から着手され、1798年の春には完成していたと見られる。まだ交響曲には着手しておらず、ピアノ・ソナタ《悲愴》などと同時期の作品。「ハ短調」というベートーヴェンにとって特別な調性が用いられている通り、この作品は、作品9の他の2曲を大きく凌駕している。

4つの楽章からなり、第1楽章冒頭の主題動機は半音階的進行により、深遠な装いをまとっている。アダージョの第2楽章は、ため息を想わせるテーマが魅力的で、逡巡しつつ歩を進めるようなテンポに独自のものがある。第3楽章は重厚なスケルツォ。第4楽章は、翌年に完成する弦楽四重奏曲第1番の終楽章のテーマと同じ三連符で始まり、展開部でのフガート処理に未来の巨匠の萌芽が感じられる。

R. シュトラウス：ピアノ四重奏曲

1880年代初頭から1893年にかけて、青年リヒャルト・シュトラウスは、習作ともいふべき室内楽を盛んに書いていた。1884年11月に自作である「13吹奏楽器のための組曲 作品4」を振って指揮者デビューを飾ったシュトラウスが、最初にして最後となったピアノ四重奏曲を書き上げたのは翌1885年1月のこと。初演は同年12月8日。出版は1886年の春で、マイニンゲンの公爵ゲオルク2

世に捧げられた。

伝統的な4つの楽章から構成されている。第1楽章はハ短調のソナタ形式。暗い情念を感じさせるテーマはブラームスの影響が濃厚だが、ピアノのアルペジオに弦のトリオが厚いハーモニーを奏でるあたりはシュトラウスの新機軸といえる。第2楽章は《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快的な悪戯》を想わせる諧謔的なスケルツォ。第3楽章のアンダンテはピアノが主役。夢見のようなメランコリックなテーマをピアノが奏で、弦楽器が次々に寄り添っていく。第4楽章のヴィヴァーチェは、逡巡と熱狂というアンビバレンツな情念が交錯するなか、華麗に閉じられる。